

医人伝

自分は本当にがんなのか、治療法は正しいのか。そんな患者の切実な声が全国から寄せられる。メールで、手紙で、電話で。勤務時間外に会って話を聞くことも。患者の組織や細胞の検体を送ってもらい、病理診断の「セカンドオピニオン」として自らの意見を述べる。すべて無償のボランティアだ。

「質問に丁寧に答えることで患者が納得し、前向きに治療に取り組めるようになる」

病理診断は病理医が患者の細胞、組織などを肉眼や顕微鏡で調べ、がんかどうかや悪性度を判断。結果に基づいて治療方針が決まるが、患者に説明するのは主治医のため、患者と接する機会はほとんどない。

ボランティアに取り組むのは「患者に顔が見える病理医になる」との思いから。最初に患者が受けた診断と同じになり、それらを分かりやすく説明するこ

藤田保健衛生大(愛知県豊明市)

第一病理学教授

つみ ゆたか
堤 寛さん(63)



がん経験者のピアノ伴奏に合わせ、オーボエを演奏する堤寛さん(名古屋緑区)

とは多いが、異なる意見や誤診が疑われるものも。その場合は直接主治医に意見を伝えたり、

患者に「この点をじっくり聞いてみたら」と助言したりする。

きっかけは前任地の東海大医学部(神奈川県伊勢原市)に所属していた二十年近く前。医師の立場で加わった全国の乳がん患者会のメールリストで、治療への不安を訴えるメールが山のように届いた。外来の短い診察時間では主治医の十分な説明がなく、「こんなことを聞いてたら嫌われるかも」との遠慮も多くの患者に共通していた。

丁寧に病理診断しても、それが十分に伝わっていないものどかさ。専門は感染症だが、分ける範囲でメールや、患者団体が主催する講演会の後で医療相談や無料のセカンドオピニオンに応じるように。二、三時間も話を聞いたり、亡くなるまで二年間、メールでやりとりしたりしたこともある。

横浜市出身。医師を志したのは「何となく」だったが、「せっかく学んだ医学の知識を生かしたい」とすべての病気に関係する病理を専門に選んだ。地元のがん患者支援団体に加わり、趣味のオーボエを生かし、がん経験者と共演するコンサートも開催。全国の病理医らでつくる「日本病理医フィルハーモニー」の団長も務め、五月には名古屋市内で演奏会も開く。「医療も音楽も皆でつくり上げるもの。医師が患者さんの中に積極的に入っていくことで、医療への不信感も緩和されれば」

(山本真嗣)

患者が頼れる病理医に